

作文部門審査講評

三 浦 登 志 一

山形県教育庁義務教育課指導主事

第二十五回「ごはん・お米とわたし」作文・図画コンクールの作文部門には、県内六十四校から二九九作品の応募がありました。全国審査では、朝日村立朝日中学校二年・遠藤晃毅君の作品が農林水産大臣賞を受賞するという、すばらしい成績を収めました。

作品の審査を通して感じたことは、自分の体験を通して、考え、それを文章に書き表すことの大切さです。自然への温かなまなざしや家族・農業に携わる人々への思いやりの心が、子どもたちの実感を通して育っていると思いました。

では、県審査の結果と作品の紹介をいたします。

第一部（小学校一年生から三年生）の「給食おもしろ話」（最上町立赤倉小学校三年・岸 詩音・県知事賞）は、給食が大好きで、給食の時間が一番楽しいという気持ち伝わってきます。担任の先生との会話もみごとに描かれていて、その場の様子が思い浮かぶユーモアのある作品です。「おばあちゃんのおささま」（榎引町立榎引東小学校樺代分校二年・森 麻美・県中央会会長賞）は、昔から伝わるおささまを作るおばあちゃんとの心の交流を描いた作品です。二人のほのぼのとした会話から、かわいい孫にやさしく教えるおばあちゃんと、ぎこちない手で懸命にささまを作る麻美さんの姿が目に見えるようです。

第二部（小学校四年生から六年生）の「ぼくもがんばる」（鶴岡市立湯田川小学校四年・難波裕人・県知事賞）は、一生懸命育てた稲が倒れ、がっかりするお父さんの姿をだまっで見つめながら、自分も心を痛めている様子が描かれています。自分の今までの手伝い方を反省して、これからはもっとお父さんを助けてあげたいという気持ちが、読んでいる人にも強く伝わってくる作品です。「私とおいしいお米の生活」（山形市立明治小学校六年・佐藤香織・県中央会会長賞）は、毎日、満ち足りた思いで生活していることが伝わってきます。愛情いっぱいのお父さんの姿、鮮やかな色彩で描かれた水田、量感

たっぷりの稲の様子など、確かな表現力を感じます。お米のもつ優れたところが、実際の体験の中でのびのびした文章で語られています。

第三部（中学校一年生から三年生）の「白い優しさ」（天童市立第三中学校二年・佐藤 望・県知事賞）は、「ごはんは優しさのかたまり」というテーマが、本人の体験をおしてよく描かれています。また、本人の目に映った稲刈りの光景が絵画のように描かれ、農業に携わる家族の収穫時の感動が伝わってきます。作者の成長を温かく見守りたくなるような作品です。「父の米作りはみんなへの愛情」（朝日村立朝日中学校二年・清野 舞・県中央会会長賞）は、祖父の死後、父親を中心に家族で稲作に励む姿が印象に残ります。作者が大地の香りに好感を持ち、働くことの喜びや美しさをよく知っていることが分かります。稲作をおして家族の絆を深めている様子がしみじみと伝わってくる作品です。

農林水産大臣賞に輝いた「黄金の秋」（朝日村立朝日中学校二年・遠藤晃毅）は、稲作の手伝いを面倒に思い、大変な仕事を楽しくするにこなす父や祖父の姿に疑問を感じながらも、ひかれていく心の変化が見事に表現された作品です。素直に仕事を手伝えない自分をしっかりと見つめる目、がむしやりに力仕事に精を出す姿にたくましさを感じます。目に映った黄金の稲穂と、作者の一步成長した姿が一体となって表されています。

来年度も、今年以上に、たくさんの方の学校の一人でも多くの子どもたちから作品が寄せられることを期待しています。